

# パネル発表「アイガモのアイちゃんといっしょ！」

～気付きを高める継続飼育～

三野 浩一

08-01

## 1 はじめに

小学校低学年の生活科の内容に「飼育・栽培」がある。単に飼育・栽培をするだけでなく、継続的な飼育・栽培が求められている。生活科を中心としての2年間に渡るアイガモの継続飼育を通して、アイガモが日々成長していることに気付き、自分本位の見方や考え方から、アイガモの立場に立った見方や考え方ができるような、気付きの質の高まりを期待した。さらに、アイガモのお世話を通して、自分自身の成長にも気付き、さらなる自分自信の成長を願う気持ちを育てることもねらいとして、2年間取り組んできた。

## 2 継続飼育について

小学校の児童にとって、「継続飼育」を行うことの目的は、「命について考えること」であり、言い換えるならば、「命の教育」である。

また、小学校の「生活科」からの視点を加えるなら、「継続飼育」から次の3点が期待できる。

- ・近な植物や動物に興味・関心をもつことができる。
- ・植物や動物を大切にする気持ちが育まれる。
- ・責任感を育てることができる。

## 3 アイガモとのストーリー

附属鎌倉小学校において、平成24年度と平成25年度の2年間（1年生から2年生の2年間）、私が担任したクラスで行ってきたアイガモの継続飼育の記録をまとめてみた。

### 【アイガモとの出会い】

アイガモとの出会いは偶然であった。私がペットショップでアイガモの雛が売られているのを偶然見かけ、そこから、自分が担任している学級で飼育できないかと思ったことが出発点であった。

1年生の子ども達が小学校に入学して間もない5月。1年1組の子ども達と学

校のプールヘヤゴやオタマジャクシを探しに向かった。プールに着くと目に飛び込んできたのは、プールを泳ぐカルガモの親子だった。カルガモの親子との出会いと私がペットショップでみかけたアイガモの雛がうまく重なり、クラスでアイガモの飼育をしてみようという雰囲気が生まれた。

### 【ハードル】

生き物を飼うことは簡単には始められない。とくに、学級で生き物を飼うにあたり、動物アレルギーの児童がいないかが問題となる。また、管理職からの許可や保護者の理解も得る必要がある。これらのハードルを越えてはじめて継続飼育が始められる。

幸い、学級には動物アレルギーの児童も無く、管理職からの許可を得て、保護者の理解も得ることができ、アイガモの飼育を開始することができた。

### 【飼育開始】

1年1組の教室は1階にあり、テラスからすぐに低学年用のグラウンドに出ることができる場所にある。そこで、児童が学校にいる昼間は、教室からすぐにみえる場所にケージを置き飼育をした。児童が帰った後の放課後から登校してくる朝までは、1組の教室にケージを入れて野良猫などの被害に遭わないようにした。

最初の頃は、担任が餌や水をあげたり、ケージの掃除をしたりしていたが、それを見ていた子ども達は、「僕もやりたい。」「私もお手伝いする。」と進んでアイガモのお世話する姿が見えるようになってきた。あえて当番を決めるなどはせず、子どもたちの主体性を大切にした。

また、お家の人とインターネットなどを使いアイガモの飼育の仕方やどんなものを食べるのかを調べてくる子もあり、一人ひとりの子が少しずつ「自分たちが育てていくんだ。」という気持ちをもち始めた。

## 【名前を考える】

すでに教室では、ゴールデンハムスターの飼育をしており、クラス全体で話し合いをもって、「ハムちゃん」という名前を決定した経験があるので、すぐに子どもたちから「名前を決めよう。」という声があがりクラス全体で話し合いをもった。名前は、「アイちゃん」となった。

この時点では、アイちゃんが雄なのか雌なのかはよくわからず、それほど羽の色も濃くなかったため、なんとなく「雌かな。」というイメージで子どもたちは接していた。

## 【夏休み期間の飼育】

長い夏休み期間は、継続飼育をするうえでの大きな課題である。

1学期のように教室とテラスでの飼育は難しいため、中庭にある飼育小屋の1部屋を飼育委員会から借りて飼育をすることにした。クラスの保護者にも協力を依頼し、当番を決めて一人一回親子でアイガモの世話をするために学校に来てもらった。夏休みの宿題として、そのときの様子を「あいちゃんのおせわカード」に記録させた。さらに、お家の方にもその時の様子や感想を記入してもらった。親子で飼育に関わることから、親の姿から子どもが学ぶことや子どもの成長を親が感じることでできる場面が生まれてくれることを期待した。

## 【手紙を書く】

10月には、アイちゃんの気持ちを想像し、1年1組のみんなへの手紙を書くという活動を取り入れた。その手紙から、子どもたち一人ひとりのアイちゃんへの思いや、これからも続けていく飼育活動の課題がみえてくるのではないかと考えた。多くの子どもから、「いつもお世話をしてくれてありがとう。」という言葉が出てくる一方で、「水をかけないで。」「ほうきでたたかないで。」という言葉も多くみられた。手紙を書くという活動は、自分たちのふだんの行動を客観的に振り返ることができると感じた。また、生き物に対する接し方は、今後の課題であることもクラスで共通理解ができた。

## 【考える・話し合う】

11月のある日、「先生、他の学年の子

が勝手にアイちゃんのお世話をしてるから注意して。」という声があがった。また、「他の学年の子がアイちゃんをいじめるから、やめさせて。」という声も多く聞くようになった。

そこで、これらの問題に対してみんなはどう考えているのかを話し合った。

「1年1組のアイちゃんだから、他のクラスや学年の人がお世話をするのは、いやだ。」

「誰でもアイちゃんのお世話をしてもいいと思うよ。」

「約束を守ってくれば、アイちゃんと遊んでもいい。」

「1年1組のことを忘れてしまうかも。」いろいろな考えや思いをお互いに出し合った結果、以下のことが決まった。

◎当番を決めて、休み時間は必ずお世話をしてアイちゃんの安全を見守る。

◎水曜日と木曜日は、他の学年や他のクラスも自由にお世話をしてもいい。

◎アイちゃんのお世話についてのポスターを作る。

## 【詳しく知る】

アイちゃんのお世話が軌道に乗る中で、クラスのある保護者が『アイガモの絵本』という本を私に紹介してくださった。この本は、小学生向けに書かれており、アイガモの誕生から、水田でのアイガモ農法について、さらには屠殺についてまで分かり易く書かれている。そこで、この本を資料として、アイガモについて、詳しく知ることを学習の課題として設定した。

「アイガモは、アヒルのメスとマガモのオスから生まれたんだ。」

「アジアでは、アヒルの卵や肉が日常的に食べられているんだ。」

「アイガモは、田んぼの雑草を食べてくれるんだ。」

「アイガモは、アヒルの肉よりも美味しい・・・。」

「アイガモは、食用として育てられているらしい・・・。」

## 【2年生になって】

アイちゃんのお世話は今までと変わらず、子ども達は続けていたが、大きな問題があった。それは、2年生の教室から

は飼育小屋が見えないということである。1年生の時は、教室から飼育小屋が見えていて、アイちゃんの様子がよくわかったが、今度はそれができなかった。

子ども達は、いつでもアイちゃんを見ることのできるように教室のテラス横の花壇にアイちゃんのすめる場所を作ること考えた。まずは、実現が難しいような案も含めて一人ひとりがアイデアを出し、次にその中から現実的で実現可能な方向を探っていく。

### 【アイちゃんパラダイス】

いろいろなアイデアが出てきた中で、もともとは小さな池として利用されていた、ため池跡を有効的に活用し、その周りに木材で囲いを作るという案で計画がスタートした。

のこぎりで木材を切り、金槌で釘を打ち、木材にマジックで色を塗るなどの作業をクラスのみんなで協力しながら、教室からすぐそばにアイちゃんが生活できる場所を作った。この活動の中で、ある子どもが「アイちゃんパラダイスだね。」とつぶやいたところから、その場所を「アイちゃんパラダイス」と名付け、子ども達はそれを略して「アイパラ」と呼んだ。

この活動は、教師の思っていた以上に子ども達は熱中した。のこぎりや金づちを初めて使うという子も多く、使った経験のある子がいろいろとアドバイスをしていた。また一人では難しい作業は、声を掛け合いながら協力する姿が見られるなど、充実した活動となった。

### 【2回目の夏休み】

昨年と同様に当番制で、親子でのアイちゃんのお世話をお願いした。さすがに2回目（冬休みもお願いしていたので、3回目の親子もいた）なので、大きなトラブルもなく、長い夏休みを越すことができた。そして今回も、子どもは観察記録を書き、保護者の方々にもコメントを書いていた。保護者の多くのコメントに、大きくなったアイちゃんのことと同時に、自分の子どもの成長に触れるコメントが多いことに、継続飼育の価値を実感することができた。

### 【プレハブ校舎への引っ越し】

10月15日から校舎の耐震工事のためプ

レハブ校舎での生活がスタートした。

完成した「アイちゃんパラダイス」も使用できず、飼育小屋からもさらに離れた場所への引っ越しとなり、アイちゃんとの距離が離れてしまった。そこで、プレハブ校舎は、プールのすぐそばにあるという利点を生かして、子ども達が学校で生活している時間帯だけ、アイちゃんをプールまで連れてきて世話を続けていくことにした。

### 【病気？】

アイちゃんのプール生活も始まり1ヶ月以上が過ぎたある日、当番の児童たちがアイちゃんの足の異変に気付いた。足の裏に黒い塊ができていた。子どもたちは、本などで調べ、アヒルなどがなりやすい病気の「趾瘤症」ではないかと考えた。そこで、すぐに動物病院へアイちゃんを連れて行き診察してもらった。やはり「趾瘤症」であり、獣医さんからプールのようなコンクリートばかりの場所で飼育することはすぐにやめた方がよいとアドバイスをいただいた。

その結果、少し離れてしまうが、飼育小屋での飼育にもどすことになった。プレハブ校舎からは離れているが、休み時間は、当番の子どもたちが必ず様子を見に行くことにした。

### 【フォトブックを作る】

夏休みの自由研究で、家族との旅行の様子をフォトブックにまとめてきた児童がいた。写真をいろいろな形に切り取って貼ってあったり、吹き出しを有効的に使って言葉を挿入したりと、工夫があり、旅行の楽しさがとてもよく伝わってきた。

このフォトブックを参考にして、1年生から飼育してきたアイちゃんとの思い出をフォトブックにまとめていくと面白いのではないかと考えた。1年生からのアイちゃんとの思い出を時系列でまとめていくことで、アイガモの成長と自分自身の成長が同時に実感できるのではないかと期待している。

### 【3年生になったら】

2年生の3月、「3年生になったらアイちゃんをどうするか。」が大きなテーマとなった。ほとんどの子どもは、「3

年生になっても自分たちで育てる。」「クラスがばらばらになっても、当番を決めてお世話をする。」という意見に賛成だった。その思いは確かに強く、2年間の継続飼育で「自分たちのアイちゃん」という思いが、子ども達の心に確実に育っていた。

#### 【今年度は・・・】

今年度、3年生に進級した子ども達は、クラス替えがあり、3つのクラスに分かれた。「クラスが分かれても、自分達でお世話をするんだ。」という思いでスタートした4月であったが、現実問題として、なかなか難しい面も出てきていた。それでも、常にアイちゃんのことを気にかけている児童が中心となり、飼育は継続している。

また、保護者の方々もアイちゃんの様子を気にかけてくださり、授業参観などの日に保護者の方々と飼育小屋を清掃してくださる場面もあった。そして、今年の夏休みは、元1組の保護者で集まり、昨年までと同じように親子でお世話をする当番を決め、アイちゃんのお世話を継続している。

#### 【再びアイガモの飼育を開始】

一方、今年度私が担任をしている1年生のクラスでも、アイガモのヒナの飼育を始めた。アイちゃんのお世話を経験から、1羽ではなく2羽のヒナを購入して飼育を5月の下旬から開始した。

アイガモの飼育を経験している3年生に話をきいてみたり、3年生がアイちゃんをお世話する様子を見たりして、1年生の児童も順調にアイガモの飼育を継続していた。

ところが、夏休み明けに2羽のうちの1羽がカラスに襲われてしまうという事件が起きてしまった。この出来事は、子ども達にとっては、生き物を飼育することがどれだけ大変なことであり、自分たちの責任のおもさや命の大切さを実感できた貴重な経験となった。

#### 4 まとめ

アイガモの継続飼育は、いろいろなことが偶然に重なり、始まったことである。しかし、「継続は力」なりと言うように、飼育を継続していると、そこからいろいろなことを子ども達が経験できることを実感できた。アイガモを媒介として、クラスの子も同士、1年生と3年生が、親子が、教師と児童が、学校と獣医さんが、など、いろいろな人と人とのつながりも生まれてきた。アイガモは10年から15年の寿命と言われている。まだ3年目である。アイガモの継続飼育は始まったばかりであり、私は、アイガモたちが、これからもたくさんの物語を作ってくれることを期待せずにはられない。

(横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校)